

文化財 ニュース

37 Autumn 2025



特別展

THE SHOWA MUST GO ON —「昭和」という舞台を観に行こう—

令和7年12月6日(土)～
令和8年2月23日(月・祝)

休室日：12月15日(月)、12月27日(土)～1月4日(日)、
1月19日(月)、2月16日(月)

主催：千代田区、千代田区教育委員会

協力：千代田区立日比谷図書文化館

—— いずれも ——

会場：千代田区立日比谷図書文化館1階 特別展示室

開室時間：10時～19時(金曜10時～20時、日曜・祝日10時～17時)入室は閉室の30分前まで

観覧料金：一般500円、大学・高校生300円(千代田区民・中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方および付き添いの方1名は無料)

Index

2-3 特集 企画展
千代田の大奥 —時代へのまなざし—

4-5 特集 特別展 昭和100年
THE SHOWA MUST GO ON
—「昭和」という舞台を観に行こう—

6-7 埋文News
【速報】内幸町一丁目遺跡発掘調査

8 文化財事務局通信
千代田ミュージアムネットワーク



千代田区立日比谷図書文化館 企画展

千代田の大奥

CHYODA NO OKU

時代へのまなざし

企画展

千代田の大奥

—時代へのまなざし—

令和7年10月1日(水)
～11月9日(日)

休室日：10月20日(月)

主催：千代田区、千代田区教育委員会

共催：千代田区立日比谷図書文化館

千代田の大奥 一時代へのまなざし



楊洲周延画「千代田の大奥 観菊」(千代田区所蔵)

展覧会の見どころ

1

華やかな大奥イメージの創出にも 影響を与えた浮世絵「千代田の大奥」を全点公開



明治27年(1894)から同29年にかけて刊行された浮世絵「千代田の大奥」は、浮世絵師楊洲周延の画業を代表する作品の一つです。江戸時代には、江戸城大奥の暮らしや風習、将軍家に関わることを表立って描くことが禁じられていましたが、明治以降、絵画の中でその様子を表現することが許されるようになりました。大奥の女性たちが華やかに表現された「千代田の大奥」は、人々の大奥イメージの醸成に影響を与えたと言えるでしょう。本展では、区内在住のコレクターより区に寄贈された「千代田の大奥」を全点公開し、周延が描いた江戸城大奥の世界をご覧ください。

2

「時代を振り返ること」に着目し、明治の人々が「江戸」を どう捉えていたのかを史料から紹介

明治20年代、人々の間では江戸時代を懐古するムーブが沸き起こっていました。周延もその一人として江戸時代を振り返り、作品の中で「江戸」を表現しました。明治の人々は、過ぎ去った「江戸」をどのように見つめていたのでしょうか。明治22年(1889)8月に上野で行われた「東京開市三百年祭」に関する記録や、かつて江戸幕府に仕え、維新後それぞれの道を歩んできた旧幕臣たちの史料を中心にご紹介します。

展示構成

第1章

私たちの「江戸」イメージ

江戸時代と聞いて、どのようなイメージを思い浮かべるでしょうか。戦のない平和な時代？将軍家康や吉宗？江戸城？浮世絵、歌舞伎などの文化・・・？江戸時代の絵や古文書、古い町並み、寺社や城跡から、「江戸」をイメージすることがあると思います。本章では、「時代を振り返る」という展示テーマに関連し、現代の私たちが思い描く「江戸」イメージの源泉を紐解いていきます。そのシンボルでもある江戸城の最奥部、大奥にスポットを当て、大奥とはどのような空間だったのか、女中たちはどのような道具を使っていたのかなどをご紹介します。

第2章

「千代田の大奥」 —楊洲周延が描いた「江戸」

第1節 明治の浮世絵師 楊洲周延

「楊洲周延」という名前は聞き馴染みがないかもしれませんが、日本史の教科書に載っている「鹿鳴館の舞踏会の絵」や、「西南戦争の絵」というと、思い当たる方も多いのではないかと思います。越後高田藩士の家に生まれた橋本直義（1838－1912、のちの楊洲周延）は、若い頃に歌川国芳や豊原国周らに学んだ後、藩士として戊辰戦争に参加しました。維新後、明治8年（1875）に浮世絵師として復帰し、才能を発揮します。明治時代を象徴する作品を数多く残した、周延の画業を紹介します。

第2節 「千代田の大奥」の1年

楊洲周延は、旧幕臣やかつて奥女中を務めていた人たちの回顧談をもとに江戸城内の様子を浮世絵として描きました。その作品の一つが「千代田の大奥」です。ここでは、春夏秋冬と日常に分けて、40組全点を公開します。周延本人は江戸城の内側を目にする機会はなかったとされ、描かれた御台所や奥女中の姿はあくまでも周延が思い浮かべた大奥のイメージということになります。そして、この作品自体も、現在の「大奥」イメージに多大な影響を与えています。

第3章

明治20年代の懷古 —明治人が見つめた「江戸」

明治時代になり、日本が近代国家としての歩みを進めていく一方で、かつて江戸時代に幕臣だった人たちは人生の終わりに過去の時代を振り返り、「江戸」を懐かしんでいました。明治22年（1889）、大日本帝国憲法が公布された同じ年に、旧幕臣を中心に「東京開市三百年祭」が開催されます。明治の人々はどういう時代に振り返り、「江戸」を見つめていたのでしょうか。（学芸員 篠原杏奈）



市岡正一著『徳川盛世録』（千代田区所蔵）



「江戸開府三百年祭上野東照宮社前之図」
（『風俗画報』第9号、個人蔵）

● ● 関連イベント ● ●

1 関連講座

関連講座①

浮世絵師・楊洲周延が描いた「大奥」の世界

日時 令和7年10月13日（月・祝）
14時～15時30分

講師 村瀬 可奈氏（東京国立博物館 研究員）

関連講座②

日沼時代の大奥 権力者 高岳

日時 令和7年11月1日（土）
14時～15時30分

講師 畑 尚子氏（國學院大學・青山学院大学 非常勤講師）

—— いずれも ——

会場 日比谷図書文化館地下1階
コンベンションホール（大ホール）

定員 200名（申込順）

参加費 一般 1000円（区民 500円）

申込方法などの詳細：
企画展の特設ホームページを
ご確認ください。



2 担当学芸員による展示解説

日時 令和7年10月10日（金）・31日（金）
各回 18時より30分間

会場 日比谷図書文化館1階 特別展示室

参加費 無料（事前申込不要、別途観覧料は必要です）

THE SHOWA MUST GO ON

—「昭和」という舞台を観に行こう—



日比谷公園小音楽堂・日比谷公会堂



神田シネマパレス



オリオン座



日本劇場



九段会館（旧軍人会館）



神田日活館

劇場でたどる千代田の昭和

令和 7 年（2025）は昭和が続いていれば昭和 100 年に、令和 8 年（2026）は昭和元年から数えて満 100 年にあたります。この節目の年にまたがり、昭和時代を取り上げた特別展を実施します。本展示では、様々な劇場を通じて、昭和という時代と文化を追っていきます。

※今回の展示で示す劇場には、演劇専用として建てられた劇場のほかに、映画館や公会堂など、舞台空間を持つ場所を含みます。



見どころ
①

娯楽の場、 だけではない劇場の姿

劇場というと単純に娯楽の場と思われるかもしれませんが。しかし注意深く見てみると、歴史の影響を深く受けた場所でもありました。帝都復興のなかで建てられた劇場、戦時中には演目の規制や軍需工場への転用を余儀なくされた劇場、戦後 GHQ に接収された劇場、国際社会への復帰を果たし、国際的なスターを迎えた劇場……。本展示では劇場で開催された催しと、劇場そのものの両面から昭和という時代を観ていきます。



見どころ
②

千代田区内の 様々な劇場の歴史を紹介

千代田区の特徴のひとつに、歴史のある複数の劇場施設が立地していることがあげられます。この特徴は明治維新後に始まり、様々な劇場空間が登場しました。昭和に登場したものだけでも、神田日活館、神田シネマパレス、日比谷公会堂、日本劇場、東京宝塚劇場、日生劇場、国立劇場、など様々な施設がありました。展示では今は無い施設についても紹介し、昭和という時代の移り変わりを観ていきます。



● ● 関連事業情報 ● ●

1 講演会・関連講座

講演会①

東京宝塚劇場の昭和（仮）

日 時 令和7年12月13日（土） 14時～15時30分
 講 師 鈴木 国男氏（共立女子大学 教授）
 定 員 60名
 参加費 参加費：500円 申込：要

講演会②

日比谷公会堂 一歴史が演出された舞台空間―（仮）

日 時 令和8年1月24日（土） 14時～15時30分
 講 師 新藤 浩伸氏（東京大学 准教授）
 定 員 60名
 参加費 参加費：500円 申込：要

関連講座

音楽と学ぶ昭和時代（仮）

日 時 令和8年2月21日（土） 14時～15時30分
 講 師 展示担当学芸員
 定 員 40名
 参加費 参加費：無料 申込：要

いずれも会場：日比谷図書文化館4階スタジオプラス（小ホール）
 講演会・関連講座の申し込みは、11月5日（水）から行います。
 詳細は特別展チラシ、広報千代田、HP「千代田区の文化財」等
 でご確認ください。

2 関連講座

担当学芸員によるギャラリートーク

昭和最初の日になった12月25日、
 昭和最後の日になった1月7日を含め計3回実施（各回30分程度）

日 時 令和7年12月25日（木）18時～
 令和8年1月7日（水）18時～
 2月21日（土）16時～

会 場 日比谷図書文化館 1階特別展示室

参加費：無料（別途観覧料は必要です） 事前申込：不要

「The show must go on」は欧米の演劇界でよく使われる英語の慣用句で、「どんな不測の事態や逆境があっても、もう始まったものは続けなくてはならない」という意味です。激動の「昭和」という舞台の幕明けから終幕までを展示室でご覧ください。（学芸員 井坂綾・岩城晴美）



共立講堂



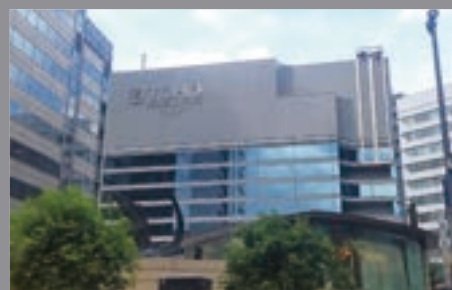
帝国劇場



東京宝塚劇場



日比谷通り



TOHO シネマズシャンテ



日生劇場

【速報】 内幸町一丁目遺跡発掘調査

今回紹介する遺跡は、内幸町一丁目街区南地区第一種市街地再開発事業に伴って、令和5年（2023）7月に千代田区が実施した試掘調査によって発見されました。その後、令和5年（2023）12月1日から令和6（2024）年7月31日まで本発掘調査を行い、現在は発掘調査報告書を刊行するために、整理作業と執筆を行っています（令和7年12月刊行予定）。

調査地点は日比谷公園から東に200 mほどに位置し、付近は江戸時代を通じて、薩摩藩中屋敷、肥前佐賀藩中屋敷が点在しておりました。調査地点は肥前佐賀藩鍋島家の中屋敷であり、支藩である小城藩がこれを譲り受け居屋敷として利用していました。



図1 遺跡地図

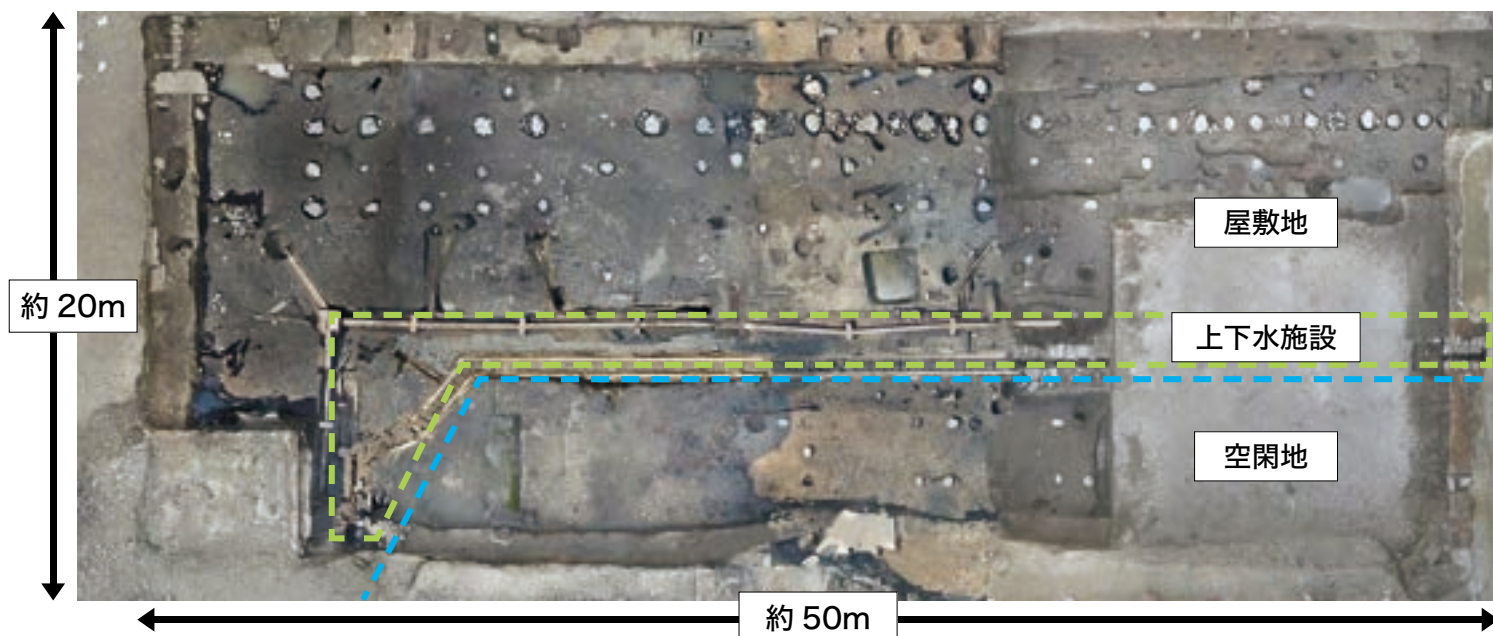
建物空間の遺構について

今回調査した場所は屋敷内において表口から奥まった場所に位置しています。17世紀前葉時点では空閑地でしたが、17世紀中葉頃に調査地を東西に走る下水溝が構築されたことを機に区画が生まれました。下水溝を挟んだ北側は、長屋や上水施設も完備された家臣団の生活と藩の運営を支える詰人空間が整備されました。南側は江戸時代を通じて遺構数が少なく、空閑地と推定されています。調査では、建物基礎や上下水施設をはじめ、井戸や石組溝、火災の痕跡が残る石敷や瓦敷が確認されました。



写真1 長屋建物基礎遺構

写真2 第3面（17世紀中葉頃）全面



出土遺物について

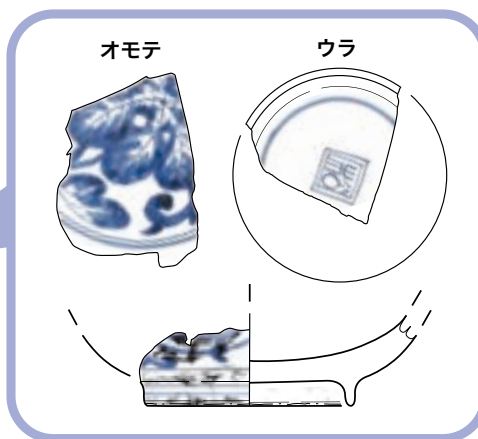
出土遺物は、磁器、陶器、土器、瓦が大部分を占め、その他木製品や金属器、動物骨も多く出土しました。特筆すべき遺物としては、鍋島家の家紋である「杏葉紋」^{ぎょうようもん}が施された瓦や、佐賀藩窯製品（破片含め 30 点）、小城藩窯製品である松香溪焼^{まつがたにやき}（破片含め 16 点）など、付近を拝領していた藩にゆかりのある製品が挙げられます。特に松香溪焼は、都内をはじめ、窯元である佐賀県小城市でも出土事例がありません。伝世品も少ないことから、今回の調査で複数点確認されたことは大きな成果と言えます。（学芸員 山田暁也）



写真3 鍋島家紋瓦



写真4 松香溪焼



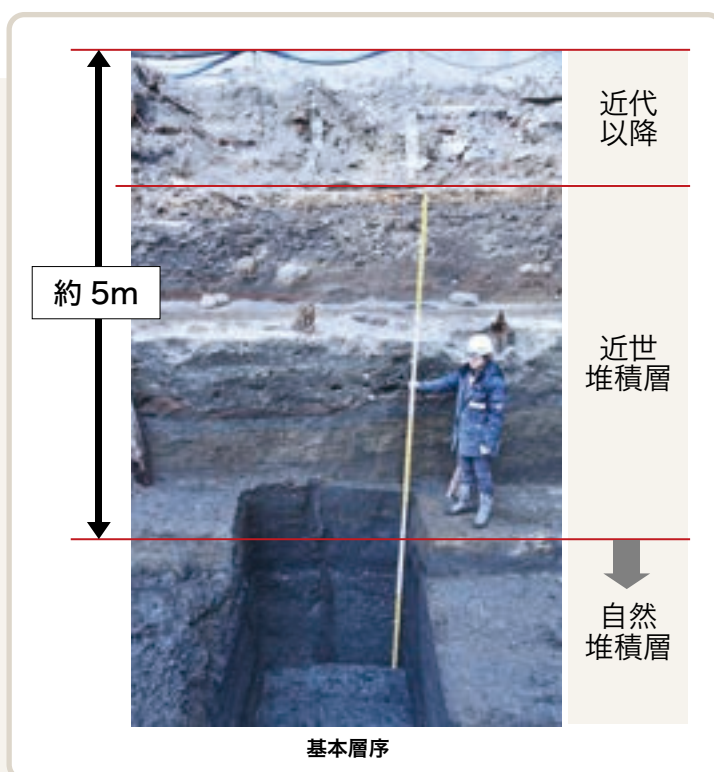
杏葉紋

写真5 拡大図

コラム

自然堆積層から現在の地表まで

本遺跡は、縄文海進（約 7000 年前頃）と呼ばれる海面上層がピークに達した以降に、海退が進行していくなかで形成された「日比谷入江」（徳川家康の江戸入府以前の遠浅の入江）に位置しております。これまでの発掘調査から中世までにある程度整地化されていたと推測されており、今回の調査では、中世頃から現代の地表まで、約 5m ほど盛土されていることが判明しました。みなさんが普段何気なく歩いている丸の内・有楽町エリアも、近世以前の海岸線から 5m ほど嵩上げされた場所かもしれません。



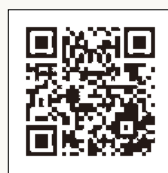
千代田ミュージアムネットワーク

千代田区には、美術館や博物館、図書館等の文化施設が集まっています。千代田ミュージアムネットワークは、これらの施設が互いに連携・協力し、区内の知的資産を有効活用し、文化・芸術の振興に資することを目指した団体です。参加館は令和7年10月現在、35館に上ります。詳細は、「千代田ミュージアムネットワーク」ホームページをご確認ください。令和7年度には参加館と区内公園をめぐるシールラリーを計画していますので、是非ご参加ください。（学芸員 平町允）



千代田ミュージアムネットワークロゴマーク

詳細はこちら



日比谷図書文化館 3 階の千代田ミュージアムネットワーク紹介コーナーでは、デジタルサイネージやチラシで参加館の最新情報を確認できます。



都営地下鉄 ●三田線「内幸町駅」徒歩3分
 東京メトロ ●千代田線
 ●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
 ●丸ノ内線
 駐車場 当施設に駐車場はありません。

開館時間 月～金 10時～22時
 土 10時～19時
 日・祝 10時～17時

文化財事務局 月～金 10時～18時



文化財ホームページ

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。
 最新情報はホームページ等でご確認ください。

休 館 日 毎月第3月曜日

文化財ニュース 第37号 (3,000部)

発行日 令和7年10月3日

編 集 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務局
 〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
 TEL: 03-3502-3348 FAX: 03-3502-3361
 https://www.edo-chiyoda.jp

発 行 千代田区教育委員会

印 刷 日本印刷株式会社